

なぞのロボット

エヌ博士は、ひとつのロボットを作りあげた。それからは、家にいる時も研究所に
いる時も、いつもそばに置いておく。通勤の途中はもちろん、休日にごく遊びに
ゆく時も、必ずいっしょだった。

博士のあとを、ロボットがひとりでに、ついてゆくのだ。ちょうど、影ぼうしのよ
うだった。あまり大きくはなく、やせた形のロボットなので、乗物のなかでも、そう
じやまにならない。しかし、これがどんな働きをするのかは、博士のほかにはだれも
知らなかった。

ある日、エヌ博士の家にやってきた友人が聞いた。

「いつも、ロボットといっしょなのですね」

「そうです。わたしには、なくてはならないものですから」

「しかし、いつうかがっても、このロボットの働いているのを見たことはありません。」

お茶を運んでもこななければ、へやや庭のそうじもしないようですね」

「そんなことのために作ったのではありません」

「いったい、なんの役に立つのですか」

「たいしたことでは、ありませんよ。それに、ほかの人には関係のないことです」

エヌ博士は教えようとしないう。そこで、友人はロボットのほうに聞いてみることにした。

「おまえは、どんなことをするロボットなんだい」

ロボットなら、うそをつかないだろうと考えたからだ。だが、なんど聞いても答えがない。友人は、またエヌ博士に質問した。

「このロボットは、耳が聞えないのですか」

「そんなことはありません」

「では、口がきけないのですか」

「そうです。その必要がないからですよ」

しかし、これだけの説明では、なぞは少しもとけない。

友人は、ますます気になってならなかった。つぎの日、エヌ博士が外出するのを待ちかまえて、そつとあとをつけてみた。



だが、ロボットは博士のあとに従って歩くだけで、なんにもしない。カバンを持ってあげようともせず、博士がハンケチを落しても、注意したり拾ったりもしない。

ついに、友人はある作戦を思いついた。犬をけしかけてみることにしたのだ。いくらなんでも、ほんやり立ったままということはないだろう。

犬は勢いよく、エヌ博士にほえついた。おどろいた博士はあわてて逃げまわったが、ロボットはそれを助けようとしめない。それどころか、いっしょになって逃げるだけだ。このようすを、友人は物かげから見つづやいた。

「なさないロボットだな。本当に役に立たないらしい。へんなものを作ったものだ。わけがわからん」

さらに、研究室へもしのびこんで、のぞいてもみた。だが、ここでも同じように、ロボットは博士のそばにじっと立っているだけだ。友人はこれ以上つづけてもむだだと、調べるのをあきらめた。

夕方になると、エヌ博士は自分の家に帰る。そして、夜になり眠る時間になると、博士は短く命令するのだ。

「さあ、たのむよ」

それによって、ロボットはやっと、ちよつとのあいだ仕事をすする。机にむかってノ

ートをひろげ、日記をつけはじめなのだ。たとえば、外出してハンケチをなくしたことや、犬にほえられたけれど、あやうく逃げたことなどを……。

エヌ博士はベッドのなかからそれをながめて、笑いながらひとりごとを言った。

「わたしは日記をつけるのが、めんどくさくてならない。そのため、このロボットを作ったのだ。しかし、こんなことはみっともなく、とても他人に話すわけにはいかない」